



[ 総長対談 ] Presidents' Discussion

# 真の総合大学を 目指して

顧 秉林 清華大学学長  
小宮山宏 東京大学総長

中国と日本、国情や大学をめぐる制度はちがっても、  
大学が解決すべき問題は同じ。

中国を代表する大学の一つである清華大学の顧秉林学長と  
小宮山宏総長が、総合大学のあるべき姿、  
そしてそこに至る道について語る。

**淡青**  
[ TANSEI ] 2005/07 16  
東京大学広報誌 第16号  
The University of Tokyo Magazine July, 2005 Vol.15

「淡青」について  
東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)  
が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選  
によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学  
の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

淡青 16号をお届けいたします。今回は特集として、今年4月に中国北京で開催されました「UTフォーラム 2005 in 中国」の様を取り上げました。折からの反日デモなどがありましたが、中国学系、材料学系、分子医学系のUTフォーラムは、いずれもたいへんな盛況で、成功を収めました。同時に開催された生産技術研究所主催のフォーラム、そして正式に開所の運びとなった北京代表所についても紹介いたします。

総長対談のコーナーは、UTフォーラムに合わせておこなわれた、中国清華大学の顧秉林学長と小宮山総長との対談です。ともに総合大学としての発展を目指す大学の学長として、今後の大学のあり方とその目標にいたる具体的方策などについてお話いただきました。対談の場所は、清華園にある清朝時代の建物をそのまま使った格式ある清華大学の学長室です。

キャンパス散歩では、本学の最西端、かつ最南端の研究施設である医科学研究所附属奄美病害動物研究施設を紹介いたします。

東京大学の幅広い活動の一端をご覧ください。

広報委員会委員長 大木 康

## Contents

02 [ 総長対談 ]  
真の総合大学を目指して  
/ゲスト 顧 秉林 (清華大学学長)

08 [ 特集 ]  
UTフォーラム 2005 in 中国

18 [ 教育・研究の現場から ]  
大学院薬学系研究科・薬学部 / 分子細胞生物学研究所

20 [ サイエンスへの招待 ]  
インド哲学仏教学 / 地球気候のモデリング

22 [ キャンパス散歩 ]  
医科学研究所附属奄美病害動物研究施設周辺

24 キャンパスニュース





**小宮山** 顧学長は2003年に清華大学の学長に就任しておられます。私は2005年4月1日に東京大学の総長になったばかりですので、顧先生は学長として私の先輩にあたります。中国は現在世界中で最も速いスピードで発展している国であり、人口も多い大国です。清華大学はその中国で最も重要な大学の一つです。まずは顧先生が清華大学の学長に就任されたとき、どんな抱負と目標をお持ちだったか、おうかがいしたいと思います。

**顧** 清華大学の中国における役割は、東京大学の日本における役割と同じです。その役割とは、第一に若いエリートの育成、第二に卓越した学術の追究、そして第三に社会に奉仕し、社会の発展を導くことです。

清華大学には私の前に16人の学長がおり、みなさん非常に良くやっておられましたので、学長になったときに私が感じたプレッシャーは非常に大きなものでした。東京大学のように、私たちも清華大学が世界の一流大学になることを望んでいます。

**小宮山** 私の理解では、清華大学はいま

非常に積極的に大学経営を進めておられると思います。新しい学部の設立や、学生のための新しい施設も次々と作っておられる。例えば、昨日拝見した清華大学の学生寮、プール、新設された法学部(法学院)など、非常にすばらしい。ハード、ソフト両面から積極的に取り組んでおられると思いました。

**顧** 清華大学には一つの目標があります。それは総合的で開放式研究型の大学を建設することです。この目的を達成するために3段階の9ヶ年計画を立てました。現在、つまり2003年から本校の創立100周年にあたる2011年までの9年間は、その第2段階にあります。そして第3段階の終わる2020年までには、私たちは国際的な一流大学のレベルに到達したいと真剣に考えています。

この目標を実現するために、6つの施策があります。第一の施策は学科についてさらに調整を進めることです。清華大学は工学中心の大学でしたが、どのようにして総合大学を建設していくか、現在の第2段階では、人文科学と医学とを強化しようとしています。人文科学と医学は社会の

発展にとって非常に重要だと考えるからです。第二の施策は、人材を養成する過程で、研究と教育をどのように結合させるかについてです。以前の大学はどちらかというと授業中心、教育中心でした。いま私たちは研究をしながら教育をしているわけです。第三の施策は、科学研究の新しい体系の創造です。以前の大学は一般的に自由な科学研究を探索していました。しかし国家の発展に役立てるためには、自由な研究に加えて、大規模なプロジェクトを行なう必要もあります。第四は、一流の教授陣をそろえることで、ここに私たちは大変な労力をかけ、「講席教授制度」を立ち上げました。これは寄付金によって、高額の給与を支払い、海外の著名な先生をお招きする制度です。これによって、例えばコンピューター・サイエンスの権威である姚期智や、ノーベル物理学賞受賞者である楊振寧などが清華大学に正式に着任したのです。第五の施策は、国際協力を強化すること。東京大学をはじめ、世界の有名大学と協力していくことです。第六の施策は、宿舍や食堂の条件を整えるなど、調和の取れた施設を作ることです。キャンパスの緑化について

「一つ一つの学部が集まることによって、いわば1+1+1が相乗効果によって、3以上のものになっているかどうか、」



**小宮山 宏**  
Hiroshi KOMIYAMA

1944年生まれ。67年東京大学工学部卒。72年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。81年工学部助教授。88年工学部教授。99～2000年評議員。00～02年大学院工学系研究科長。03年副学長。04年理事（副学長）。05年4月より第28代東京大学総長。



も、長期的な計画を進めております。

**小宮山** 顧学長から貴校における3段階の9ヶ年計画、6つの施策についてご紹介いただきましたが、今日私たちが議論すべき具体的な内容が、ほとんどそこに含まれていると思います。この中から、いくつかの話題を選んで議論を進めたいと思います。

非常に興味深いのは、清華大学はもとも総合大学であったものが、1952年に旧ソビエトの影響によって工科大学に変わり、そして、いままた総合大学としての道を歩んでおられることです。私の理解では全世界でも本当の意味での総合大学はそう多くはありません。例えばヨーロッパの大学で、非常に長い歴史を持つ大学でも工学部が含まれているところはそう多くはありません。あっても後から作られたものです。アメリカでは、スタンフォード大学は比較的技術系に傾いています。ハーバード大学などは総合大学かと思っておりましたが、医学と人文科学に傾いています。いまハーバードは工学部を開設することを考えているようです。

東京大学は明治時代に創立し127年の

歴史があり、医学校、工部大学校などいくつかの専門学校が合併して、はじめから総合大学としての道を歩いてきました。東大にしても、清華大学にしても、ハーバード大学にしても、それぞれが自分たち固有の歴史を持っているのです。

現在、東京大学は総合大学特有の悩みを抱えています。私たちの大学には法学部、医学部、工学部、文学部、理学部、農学部などいくつもの学部が一つのキャンパスの中にあります。一つ一つの学部が集まることによって、いわば1+1+1が相乗効果によって、3以上のものになっているかどうか、その点、まだ不十分なものがあるのです。

**顧** たしかに総長がおっしゃるように、1+1+1=3ではただの機械的な足し算であって、1+1+1からさらに新しいものが生み出されなければいけません。

**小宮山** そこで、いま私は学術統合化プロジェクトを準備しています。それは学内のいろいろなところがいっしょになって新しいものを作り上げていこうという計画です。まずはじめに「ヒト」というテーマを

考えています。今日の午前中、私は中国科学院のフォーラムに参加し、医学・生命科学に関するいくつかの報告を聞きましたが、各分野が非常に細分化され、専門性が深くなっています。総合大学にあっては、このように細分化された深い領域の研究を統合し、協調することによって、新しい知の成果を生み出すことを考えなければなりません。またそれは総合大学でこそ可能なことです。この方面について、私たちは清華大学の関連部門とも議論しながら、協力していきたいと思います。

一つおたずねしたいことがあります。新しい施策には資金が必要です。現在清華大学の収入の3分の1は政府からの交付金、3分の2は大学自身が会社や工場を経営して得た収入とうかがっております。このようなやり方は私たち日本の場合と違います。大学で工場を経営したり、会社から収入を得たり、この方面についての具体的状況についてお聞かせいただけませんか。

**顧** まず経費問題についてお話しすると、現在清華大学の経費は毎年30億元に達しており、日本円の500億円に相当します。

1+1+1=3ではただの機械的な足し算であって、1+1+1からさらに新しいものが生み出されなければいけません。



**顧 秉林**  
Binglin GU

1945年生まれ。70年清華大学物理学系卒。82年デンマーク・オールフス大学物理学博士号取得。83年物理学系助教授。88年物理学系教授。94～2000年物理学系主任。00年より清華大学研究生院院長。01年副学長、学位評定委員会主席。03年より清華大学学長。中国科学院 院士。





そのうち3分の1の10億元は、国からの交付金です。二番目の3分の1は、科学研究費など、教授たちが競争によって獲得した資金です。最後の3分の1にはいくつかの内容が含まれています。第一番目は寄付金です。清華大学は大変幸運で、ここ数年来各界から寄付を受けています。特に香港と台湾からの寄付金があります。二番目には大学が行っている短期講習など各種教育の学費、三番目には自分たちで経営する会社と出版社、四番目は学生たちの学費です。これが10億元になります。

国からの交付金についてですが、もちろん国からお金をいただけることはよいことだと思います。国から交付金をいただき、私たちは頑張ります。しかし中国の現状を考えると、経費全体の3分の1にいたらないほどではありますが、国が清華大学に交付するお金は、他大学と比べるとたしかに多いのです。他の大学はそれをうらやんでいます。多くの大学は国からの交付金と学生からの学費だけで、これでは大学を発展させるのは難しいと思います。

**小宮山** もう一つお聞きしたいのですが、大学は自分で銀行からお金を借りることができるのでしょうか。

**顧** 大学は独立した法人ですから、直接銀行に貸付を申請することができます。重要なのは、銀行が返済能力の有無を審査することですが、清華大学の場合、銀行側が貸付を望んでいて、低金利、無利子など、多くの有利な条件を提供してもらうことができます。しかし、返済能力はあって

も、銀行からの貸付については、私どもはむしろ慎重にそれが必要であるかどうかを考えております。

**小宮山** 清華大学では法学部(法学院)を立ち上げられましたが、新しい学部を作ろうとする場合についておうかがいします。日本の場合ですと、新しい学部を作るときには、国による審査を受けなければならず、自由度は大きくありません。中国の場合、新しい制度を設ける決定権はどこにあるのでしょうか。

**顧** いくつかのケースがあります。まず一つのケース、例えば法学院を設立しようとする場合、大学が議論をして自分たちで法学院の設立を決定できます。事前に教育部(日本における文部科学省にあたる)の許可を得る必要はありません。もう一つのケースは、国が設立を奨励している場合です。例えば、ソフト学院(軟件学院)ですが、国はコンピューターのソフトに関わる大量の人材の養成を望んでおります。そこで、条件の整っている大学に良い学院を運営することを希望する。私たちのソフト学院はこのようにして設立されました。この場合にも主として大学が自ら決定しましたが。

ただ、新学部の設立は基本的に大学自身の決定もしくは国の指導にかかっておりますが、毎年または数年に一度、国の審査委員会による審査があります。審査の結果が悪ければ厳しい結果になります。

**小宮山** 先ほどのお話で、清華大学は恵まれており、国からの交付金も比較的多

い。このような良好な状態に対して、さまざまなプレッシャーがあるということでしたが、このようなプレッシャーはどこからくるのでしょうか。他大学からでしょうか、それとも社会的なものでしょうか。私どもでも、世間はさまざまな観点から東京大学を見ています。

**顧** 中国には「頭を出した鳥は打たれる(出る杭は打たれる)」ということわざがあります。頭角をあらわしたものはたたかれる。プレッシャーは、社会と、大学との両方からのものが存在すると思います。

社会的プレッシャーは、基本的に教育に関してどれだけ投資するかの問題でしょう。これはなかなか意見の分かれるところで、教育にかけられる金額自体について様々な意見があります。また、教育投資の中で基礎教育にかけられる金額、高等教育にかけられる金額についても意見が分かれます。毎年わが国の政府が人民代表大会で議論する重要議題が、この問題なのです。私どもはこの問題についてはっきり意見を言わなければならないと感じております。地方の官僚たちは数年先のことしか見ていないからです。彼らが市長、省長になって、ビルの一つでも建てればすぐに結果を見ることができますが、教育は長い年月をかけなければ結果を見ることができません。このため多かれ少なかれ教育が二次的な位置におかれてしまうのです。

もう一つの問題は教育資金には限りがあり、教育資金を基礎教育にかけられるか、高等教育にかけられるかで意見が分かれることです。もちろん基礎教育は非常に重要で



はありますが、大事な問題は、中国のような国が教育を行なう際には、ハイレベルの人材の育成に力を入れるべきであると考えるからです。たくさん一流大学を設立することはできませんが、2、3の一流大学ならば可能です。中国の教育振興計画は、もともと北京大学と清華大学の2校だけでしたが、その他の大学からの意見があって、2校から9校に増えました。そしてさらに、今年には39校にまで拡大しました。全体の資金は相変わらず少ないわけですから、お金の分配を行なう人たちがきっぱり決断を下して、良いところには多く、良くないところには少なく分配する必要があると思います。

**小宮山** さきほどの、清華大学が工科大学から総合大学へと変化してゆく過程で、大学が主体的な決定権を持っていることをうかがいましたが、この過程において、どういう大学を作りたいかという学長のリーダーシップが重要であると思います。清華大学が総合大学としての道を歩む上で、顧学長がリーダーとして考えておられることや目標を簡単にご紹介いただけませんかでしょうか。

**顧** 実際、大学の中には様々な考え方があります。それぞれの学科の教授は往々にして自分の領域が最も重要だということばかりを強調しますが、大学は私どもがトップデザインと呼んでいるものを持たなくてはなりません。大きな方向性を把握し、最終的に決定を下す権利は、学長、副学長などからなる校務委員会にあるのです。

引き続き、小宮山先生の提起された大学の総合性の問題についてお話させていただきますと、社会と自然とに存在する問題はもともと総合的なものです。ただ人がそれを区分しているにすぎません。例えば理学系の教授はなぜかということを開き、工学系の教授はどうするかということを開いているといった具合です。このように多様な特徴を、何かの押し付けではなく、融合させることが必要で、これは彼らの仕事にとっても利点があります。現在の科学研究は総合的なものなのであります。

第二に、総合性は学生の育成にとっても多くの利点があることを指摘したいのです。教育において最も重要なのは、学生を狭い専門に偏らない完全な人間にすることです。これが、私たち清華大学が総合性を強調する理由であると考えています。

**小宮山** 私は心から顧学長のお話に賛成いたします。

さきほどの平等か集中かという問題を、別の角度から考えてみたいと思います。われわれの世界は多くの問題を抱えており、解決すべき多くの難問がわれわれの前に立ちちはだかっています。例えば貧困問題や南北問題、南北格差の問題や高齢化問題があります。これらの難問をどこの誰がどのように解決、もしくは克服することができるのか。これらの問題に挑戦できる大学は多くはないと思います。トップクラスの総合大学は、その責任を負うべきだと思いますし期待もされています。その理由は、顧学長がいま詳しくお話してくださいました。

私個人としてもこの難問題に挑戦し、克服するために尽力したい。その過程において人からあれこれ言われるとしても、このような社会からのプレッシャーは積極的な態度で、受け入れたいと思っています。

世界の難問題の解決と克服について、清華大学と協力し、手を取り合って課題に挑戦していきたいと考えております。私たちはこれら課題の克服を協力して行なうことができると確信しております。

**顧** 最後に3つのお祝いを述べさせていただきますと思います。

第一は、小宮山先生が東京大学総長になられたことに、あらためてお祝い申し上げます。小宮山総長の指導の下、東京大学が永遠に国際的な著名大学であることを心から願っております。第二に、東京大学が北京に代表所を設けられたことに対し、お祝い申し上げます。第三に、東京大学と清華大学のフォーラムが無事終了したこと。そしてこのフォーラムが、両校が学術分野においてたゆまず協力を強化していく象徴となったことに、お祝い申し上げます。今後両校が世界の様々な難問に挑戦し、大学を優れたものにするによって、ますます密接な協力関係を築いていくことを心から願っております。私も小宮山総長と手を携えながら、世界の様々な難問を解決する力を発揮できるよう望んでおります。

**小宮山** どうもありがとうございます。

2005年4月29日 清華大学学長室にて